

滋賀県立聾話学校初代校長 西川吉之助の生涯

—文献の年表を中心に—

辻 久孝

日本聾史学会

社団法人滋賀県ろうあ協会

あらまし：西川吉之助の生涯に焦点を当てて、文献の年表を分析してみた。

1、はじめに

西川吉之助先生年譜（「創立40周年誌」滋賀県立聾話学校（昭和46年1月20日発行）82～84頁）によりながら、西川吉之助の生い立ちを簡単にまとめて文章化した。さらに、いくつか調べてきた文献から年表を分析してみた。



晩年の西川吉之助

2、生い立ち

西川吉之助は、明治7年9月3日、滋賀県蒲生郡八幡町（現在の近江八幡市）で産まれた。

明治28年、北海道の私立小樽商業夜学校を設立し校長に就任したが2年足らずで廃校して、家業を継いで北海道オショロで漁業を営んだ。

明治40年、34歳の時より9年間滞米して日本人商社の支店長、支配人を歴任した。帰国後は京都に住み、その翌年に三女はま子が産まれた。

大正8年、はま子が4歳の時に耳に異常を感じて、京都医大に診てもらった結果「聾（ろう）」と診断された。吉之助は衝撃を受け、お先真っ暗だと落ち込みながら京都盲聾学校へ参観に行ってきた。しかし、当時

の手話法の授業に抵抗感を抱いて娘のはま子の将来に不安を感じた。手話法以外の教育方法はあるかどうか同校教頭先生に相談を持ち込んだところ、アメリカの文献を紹介されて読話（口話）法を知った。ジョンダットンライト氏の経営するライトオーラルスクールの通信講義録を取り寄せて翻訳しながら、はま子に口話法の教育を始めた。

大正10年、八幡町の自宅に帰ってろう教育に関する原書類を参考にしながらはま子に口話法の教育を続けた。

大正12年、ジョンダットンライト氏の来日を機に、京都ホテルではま子の直接指導を受けた。家庭教師を雇って小学校2年生の教科を教え始めた。

その結果、2年後にはま子の成績は小学校4年生以上と認められ、ラジオ放送や各地の講演行脚を始めた。また、2月に私費を投じて月刊雑誌「口話式聾教育」を編集創刊し、昭和6年1月まで刊行した。そして8月に自費で「西川聾口話研究所」を設立し、口話法の研究をしながら数名の聾児に口話法教育を行った。同月に日本口話普及会をも設立し、副会長に選ばれた。

昭和2年、文部省の後援で聾口話教員養成会の講師を務めて全国への口話法の普及を進めた。さらに、私立大阪聾口話学校、私立京都口話学園、私立新潟聾口話学校の創立にも尽力した。ついには、12月に滋賀県に公立聾学校を創立する議案を県議会に提出し、議事堂で講演、実地授業も行った。

昭和3年、はま子は県立八幡高等女学校に入学した。5月、公立の口話教育学校として、滋賀県立聾話学校が創立され、初代校長事務取扱となった。同時に西川聾口話研究所を閉鎖した。

昭和7年、聾啞学校教員たることを申請して了承され、昭和8年3月に滋賀県立聾話学校長に任ぜられた。その頃口話教育普及と発展のため家財を蕩尽し、学校

前の借家に転居した。

そして、昭和15年7月18日午前2時30分急逝した。

3、別の複数の文献を比較して

他に、「口話教育の父 西川吉之助伝」(高山弘房著)、「近江の先覚(わが国聾話教育の恩人 西川吉之助)」(西川昌子氏報)という文献がある。2冊とも読んでみると、気になることがある。それは、「口話教育普及と発展のため家財が蕩尽して、学校前の借家に転居した」年の違いである。その違いを次のとおり紹介する。

・「創立四十年誌」(滋賀県立聾話学校)

昭和8年(1933年)

3月、滋賀県立聾話学校長に任ぜられる。口話教育普及と発展のため家財蕩尽の結果として、学校門前の借家に移る。

・「口話教育の父 西川吉之助伝」(高山弘房著)

昭和11年(1936年)

口話教育普及と発展のため家財蕩尽の結果として、学校門前の借家に移る。

・「近江の先覚(わが国聾話教育の恩人 西川吉之助)」(西川昌子氏報)

(上略) 昭和12年、八幡町の本宅を整理処分しなければならなくなった折も、(下略)

以上の3つの文献のうちどれが正しいか調べてきた。このたび、北海道小樽市にある「小樽市総合博物館運河館」に有力な資料(図1)を見つけたので、分析しよう。

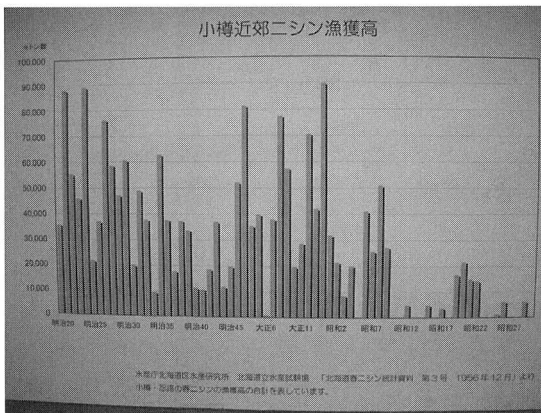


図1

昭和7年あたりはたくさん獲れていたことから、「創立四十年誌」の昭和8年は適当でないといえる。昭和12年のところをみると、数年続いて不作のようだから、「口話教育の父 西川吉之助伝」の昭和11年と「近江の先覚(わが国聾話教育の恩人 西川吉之助)」の昭和12年のどちらかになる。

さらに、もっと有力な資料があるか調べてきたところ、次のとおり掲載してあることを発見した。

「ヘレンは、近江兄弟社のメレル・ヴォーリズの縁で滋賀県近江八幡市の西川吉之助邸を訪れ、吉之助・はま子と会っている」聴能情報誌 みみだより 第3巻第386号 通巻471号(編集・発行人:みみだより会)より抜粋



西川吉之助邸の庭を歩くヘレン・ケラー

図2

ヘレンとは、ヘレン・ケラーという有名な三重苦の女性のことである。彼女の初来日は昭和12年(1937年)であることから、「近江の先覚(わが国聾話教育の恩人 西川吉之助)」の方が正しいということになる。

しかし、図2のような写真は本当に「西川吉之助邸の庭」で撮ったものであるかという疑問が残る。西川吉之助邸であることが確認できないといえよう。現在でも判明されず謎のままであるので、さらに調べていきたい。